

人形浄瑠璃における平家物語受容のあり方を巡って 付・『仏御前扇軍』論

伊 藤 り ら

はじめに

本稿は、浄瑠璃作品の素材とされた平家物語の説話の側から浄瑠璃作品の分析をおこない、浄瑠璃作者が、平家物語をはじめとする軍記から、どの説話を取り上げ、どのように加工したかを考察することにより、浄瑠璃作者による素材選定の様相や作劇法を検討するものである。

本稿における考察の対象としては、平家物語（「源平盛衰記」を含む）と、平家物語を主な素材としている浄瑠璃の作品（いわゆる「源平物」）を取り上げる。平家物語は作品を構成する説話の種類が豊富な上にその性格が明確で分類しやすく、かつ一つの説話の形が非常に明瞭で切り出しやすいため、本稿でおこなう検討には最適と判断した。

なお、平家物語とほぼ同時代、同素材を扱う軍記物語に「義経記」がある。平家物語と「義経記」は登場人物や話材が重なり合う部分もあり、どちらを素材としているかで考察対象を区切ることは問題なしとしないが、本稿では、中心となる話材が平家物語によると思われる作品のみを考察の対象とする。その理由は、今回、先に述べた視点からの分析を試みるにあたり、作品を構成する説話ができる限り単純（あまり多くの内容を含みこまないという意味で）かつ作品の文脈における位置づけが明確であり、浄瑠璃においてどのような解釈・加工・脚色が施されているかという点をはつきり読み取ることのできる作品を対象として選択する方が、分析のモデルとしては適当ではないかと考えたためである。

「義経記」は室町時代物語の影響を色濃く受けており、「系譜的には中世後期の御伽草子などの文学的世界につながる側面を見せている」とも言われ（『日本古典文学大辞典』「義経記」の項。執筆は梶原正昭氏）、平家物語とはかなり異なる要素を含みこんでいると考えられる。本稿は、ここで試みるような分析が果たして浄瑠璃作品を論ずる上で有効かどうか瀬踏みをするという意味もあり、今回は論点を単純化するため、対象を平家物語に絞った。

一、素材としての平家物語

周知の如く、平家物語には五十種を超える諸本が存在するが、本稿では、以下に述べる検討の結果、平家物語のテクストとして、原則的に流布本と「源平盛衰記」（以下、「盛衰記」）を用いることとした（以下、本稿で、「」をつけずに平家物語と言った場合、「盛衰記」「源平闘諍録」等、「平家物語」とは呼称されていない諸本も含めた平家物語全般を指す。書名が「平家物語」であることを特記すべき場合は、「」をつけて記すか、「〇〇本」と一本の名称を付す）。

平家物語に限らず、軍書（中世の軍記物語、近世に製作された通俗軍書）の類が近世の庶民に愛読されていたことは間違いないが、これらの平家物語諸本のうち、近世の大坂に在住していた浄瑠璃作者が目にするのができたものはどれであったかを判断することは、ほとんど不可能であろう。しかし、当時の書籍目録・解題を参考に、ある程度の推測をおこなうことはできるのである。以下は、諸文献に記述が見られる平家物語諸本を抜き出してみたところ、次のような結果となった。

○『群書一覽』（尾崎雅嘉著、享和二年刊）

源平盛衰記 四十八巻／平家物語 十二巻／平家物語長門本 写本 十六巻 或は

十二巻／平家物語嵯峨本 十二巻

○『参考源平盛衰記』（水戸彰考館編纂、享保十六年に精撰本完成）の凡例

十一本が掲出される。清水眞澄氏によれば、この十一本は、流布本・現在の鎌倉本・

伊藤本・八坂本・現在の康豊本・如白本・佐野本・南都本・南都異本・東寺本・長門本に該当する。

○『新編鎌倉志』（水戸彰考館編纂、奥書より貞享二年成立）の引用書目

源平盛衰記／平家物語／異本平家物語（八坂本・鎌倉本・長門本）

○京都曼殊院の蔵書目録

平家物語 片仮名本 十二策 八巻目録 一函／源平盛衰記 附目録一策 四十八

巻 廿四策 一函／平家物語 平仮名絵入 十二策

曼殊院は最澄によって比叡山に建立された天台宗の寺院で、文明年中に伏見宮貞常

親王の皇子慈運親王が入寺して門跡寺院となり、明暦二年、現在の寺地に移った。清水氏は「平家物語」の伝本が、こうした貴顕のもとでも流布本と思われる十二巻本と「源平盛衰記」の二種にとどまる事は注目される」と指摘している。

○「今大路家書目録」

平家物語 十二冊 書本／同 二十冊 書本 長府本／源平盛衰記 二十四冊 同 片仮名雑／源平闘諍録 不足五冊 書本 一ノ上下 五八ノ上下斗

福田氏によれば、『今大路家書目録』の「おおよその原型は江戸初期に成立し、江戸中期に現存本の形に整えられたと思われる」とされる。今大路家は徳川のお伽衆を務めた家柄で、室町末期の名医曲直瀬道三の流れを汲み、二代目道三が江戸に招かれて徳川の典業になって以来、今大路家と改めた。福田氏は、今大路家について「医家でありながらも、かかる芸能や文芸とからんでくる文化圏・交流圏の一つの発信地であった」「治癒の謝礼として貴人より書籍が送られるといった事情も考慮されるべきであろう」と指摘している。また、仮名草子や舞の本といった俗書、日常に使用していた医学の実用書などは記載されず、もっぱら稀覯書、家の誉れとなる書ばかりを記しているという。

○「大惣蔵書目録」

平家物語 十二冊（二種）。そのうち一種は延宝五年刊の流布本系統／平家物語 長門本 二十冊／源平盛衰記 二十四冊（二種）

大惣の目録では、長門本が貸本として整備されているのが興味深い。近世の一般の人々は、読み物的な書物（小説や軍書の類）は蔵書とするより貸本屋で借りて読むのがもっぱらであったという指摘もあり、そうした事情を踏まえれば、近世、長門本が庶民の目に触れる機会はいのほか多かつたのではないだろうか。

以上、瞥見した目録類は、門跡寺院や国学者、お伽衆のような蔵書家の蔵書目録や、水戸徳川家が総力を挙げておこなった書物編纂作業の際に用いられた引用文献であるなど、庶民には手に入れないような文献が多く含まれているであろうことが想像される。また、これらの目録類から確認されることは、これらに共通して確認できるのが「盛衰記」と流布本である、ということくらいである（この他、六つの目録のうち五つに長門本が記載されていることにも注目すべきか）。しかし、そうした点を考慮に入れたとしても、人形浄瑠璃の観客たる大衆は、平家物語諸本のうちでも特に流布本や「盛衰記」に何らかの形で接する機会が多かつたと考えることはできるのではないだろうか。以上の推定は内容的に偏った目録によるものではあるにしろ、少なくとも近世芸能である浄瑠璃を考える場合には、流布本、さらには長門本にも目配りするべきではないか、ということと言えるだろう。

続いて、平家物語の構成について整理しておく。平家物語が説話の集積から成ると

いうことは、夙に指摘されており、現在、平家物語が多くの説話から構成されていること、そのことは挿話的なもののみならず、合戦部分など平家物語の本筋をなす部分にまで敷衍して考えてよいということは、大方の認めるところであろう。

平家物語の説話については、すでに多くの研究者によって論じられているが、本稿では、平家物語を構成する説話の性格を、「あらゆる領域に遍在するメディアであり、世界を認識する方法であり、また、ある言説、事柄、事件に含まれる情報のうちから、説話管理者の価値観に基づいて伝えるべきポイントをつかみ出し、コンパクトな形でまとめた一まとまりの話柄」として捉えている。

重要なことは、説話にはすでににがしかの価値観が含まれているということ、口承にしろ書承にしろ、それほど大きな変化を受けることなしに伝承されていくためには、ある程度の短さが要求されるということである。重要なポイントのみをつかみ取る説話が長大化するということはありえない。逆に言えば、ある説話を素材として新たな浄瑠璃作品を作っていくとき、説話の含む価値観をどう捉え返していくか、また、非常にコンパクトにまとめた話柄をどう展開させていくのか、そこに浄瑠璃作者の新たな価値観や方法論の入り込む余地がある、ということである。

さて、前述のとおり、平家物語は多くの説話から構成されている。しかし、一概に「説話」といってもその内容にはさまざまなものがあり、すべてを一括りで捉えることは適当でない。本稿では、諸先学の説話分類を参考に、平家物語の説話を、本系説話（主筋を構成する説話）、合戦譚、傍系説話、背景説話の四種類に分類する。

合戦譚は本系説話に属するものであるが、軍記という作品の性格、および謡曲における戦語りなどとの関連も踏まえ、分類を別に立てることにする。また、本系・傍系にかかわりなく、ある個人に関する説話をまとめて捉えることも可能である（例えば、文覚についての説話は本系と傍系のどちらにもまたがっているが、「文覚説話群」として考えることもできる）。背景説話は、平時忠を評して「楊貴妃が幸し時、楊国忠が榮えしが如し」（巻一「清水炎上」）と述べるごとくであるが、あまりに断片的なものが多いため、本稿での検討の対象から外す。本系と傍系のどちらに目をつけるか、説話どうしをどう絡ませていくか、とすることも、浄瑠璃作者の平家物語受容のあり方や、作劇意図が現れるところであろう。

ただし、平家物語は説話から構成されていると言っても、平家物語は「説話集」ではなく、平家興亡史を大きな見通しの下に述べる「物語」である。平家物語が説話的発想を物語の文脈に位置づける手段の一つとして、「記録的記事」「編年体的な叙述様式」が考えられる。「事柄の内容の具体的な描写」を伴わず、「そうしたできごとが起き、おこなわれた」ということを日付との対応関係のもとに書きとどめている「だけ」とされる記事である。しかし、これが純粋な「事実の記録」とは言えず、物語の意図する文

脈にそった意識的操作（日付の改変など）がおこなわれていることはしばしば指摘されることである。つまり、物語の文脈が意図する方向に叙述の道筋をつけるのが記録の記事であり、その道筋に沿って、物語に肉付けをし、展開していくのが説話だと見える。

そうだとすれば、浄瑠璃作者が平家物語を素材として新たな作品を作る場合、いったん物語を説話のレベルにまで読みほどこいて平家物語の文脈から説話を解放し、説話が物語の文脈に沿う形で持っていた価値観や切り口を一度削り取った上で、今度は自分の作品の文脈に沿って、新たに説話を再構成していく必要がある。説話をどのように捉え返し、新たな意味を与えていくか、作品の文脈にどう位置づけていくか、その方法が浄瑠璃作品のありようを規定していくことになる。

また、能や舞曲と異なり、長編化が進んだ浄瑠璃の場合、一つの説話だけで作品を構成することは（できないことではないが）かなり難しいと思われる。だとすれば、いかに説話を組み合わせ、展開していくかという点に、作者ごとの作劇法の特徴が表れることになる。説話が描かない部分を補うという方法もあれば、説話に書かれたことはそのままに、新しい意味を付与するという方法も考えられる。説話の組み合わせを変えることで、別の読み方を展開していく場合もあるだろう。また、先行芸能である能や舞曲等の作品を媒介とする場合も少なくないであろう。その具体的様相について、次節以下で検討をおこなう。

二、近松の源平物

本節では、近松の作品について考察する。検討の対象とした近松の作品は表1に挙げたとおりである。この他にも源平物と隣接する作品が八作ある。それらの作品で平家物語の説話がまったく利用されていないわけではないが、主立った部分が平家物語以外の素材から構成されていると考えたため、除外した。

さて、C1からC10まで挙げた作品のうち、C3とC4、C5とC6はほぼ同内容であり、少なくともC3・C4については竹本座上演作を一部改作して宇治座で上演したものと考えられるので、まとめて扱う。また、C8「津戸三郎」は角太夫座で上演された『門出八鳥』と密接な関係を有しており、信多純一氏によって、元禄二年五月に竹本座で上演された『津戸三郎』を一部改作したものが『門出八鳥』であることが考証されている。

これらの作品に含まれる平家物語関係説話を切り出して見たものが表2である（巻数・段名は流布本による）。このうち、巻数と段名に（ ）をつけたものは、平家物語に直接該当する説話がないものである（一部分でも重なるものにはつけていない）。また、段名で「〇〇ほか」としたものは、「鬼界が鳥流人説話」「文覚説話」「藤戸合戦説話」

などとまとめられる説話群である。このほか、⑥⑧、⑦⑨⑩はそれぞれ「忠度説話」「熊谷説話」としてまとめることができる。

もちろん、ここに挙げたもの以外にも、平家物語に登場する人物が現れる局面はあつて、実は源家再興のための兵を集めている常盤と、それを知った弥平兵衛宗清が常盤・牛若らを落とすという場面である。しかし、この「常盤を見逃す宗清」という設定は、すでに『烏帽子折』（元禄三年〔推定〕、竹本座）に見えており、「平家物語」巻十一「三日平氏」などより、むしろ「義経記」や舞曲「伏見常葉」などから着想を得ているのではないかと考えられるので、そうしたものは除いてある。

*1は流布本には該当説話がないが、長門本巻二〇か、あるいはそれに拠ったかと思われる謡曲「盛久」などから素材を得ていると考えられる。*2は、謡曲「景清」「大仏供養」「舞曲「景清」などにある、平家残党の後日譚を景清一人に集約した内容の先行作品に拠るもので、「景清物」とも言うべき作品を形成する伝承群であるが、平家物語に直接の典拠はない。*3の津戸三郎往生譚の部分は、「法然上人伝記」や「法然上人伝」といった一連の法然上人の伝記に書かれる津戸三郎の事蹟に拠るものであることが、信多氏によって明らかにされている。

表2を一見してわかるとおり、近松は、C1〜6までは平家物語の説話（群）を、組み合わせることなく単独で用いているが、元禄以降の作品では、説話を複数組み合わせさせて作品を構成している。特に、平家物語を素材とする最後の作品『平家女護鳥』では、鬼界が鳥流人説話、文覚と頼朝との出会い、の二つの流れに、重衡の南都焼き討ちと清盛あつち死に、常盤・牛若と弥平兵衛宗清などを絡ませており、それ以前の作品に比べ、説話の組み合わせが複雑になっている。いずれにしても、作品数が十に對して、素材とされた説話が十六という点からも、近松は一つの浄瑠璃作品でそれほど多くの説話を組み合わせる傾向があるといえる。

また、これらの説話を、本系・傍系に分類すると、本系に属するものが②⑤⑬⑭、合戦譚に属するものが⑦⑨⑪⑫、傍系に属するものが①⑥⑧⑩、平家物語に直接典拠が見出せないものが⑬⑭となり、本系説話に分類されるものが圧倒的に多い。以上、十六の説話のうち、⑬⑭は平家物語に見出せない内容なので省略するとして、残る十四の説話の受容のあり方について簡単に見ていきたい。

まず、説話の文脈にそれほど手を加えずに用いていると考えられるものは、②③⑩である。紙幅の都合上すべてを論じることはできないが、いくつか例を挙げる。

②では、「俊寛、成経、康頼の三人が鬼界が鳥へ遠流になり、俊寛以外の二人は赦免されるが、俊寛は一人鳥に残される」という説話の骨格には、ほとんど手が加えられていない。また、この説話に海女千鳥、俊寛妻の東屋というキャラクターを絡ませて

表1 検討作品一覧(作品番号は本稿での検討にあたり、便宜的に付与したもの)
近松門左衛門

作品番号	外題	初演年・劇場
C1	出世景清	貞享二年(一六八五) 竹本座二の替り(推定)
C2	佐々木先陣	貞享三年七月(一六八六) 竹本座
C3	薩摩守忠度	貞享三年十月 竹本座
C4	千載集	貞享三年(推定) 宇治座
C5	主馬判官盛久	貞享三年十月以後、貞享四年正月以前(推定) 竹本座
C6	盛久	『主馬判官盛久』の上演以降 宇治座
C7	大原問答(存疑作)	元禄初年(一六八八)頃(推定) 竹本座
C8	津戸三郎	元禄二年五月(一六八九) 竹本座
C9	癡静胎内拵	正徳三年閏五月(一七二三) 竹本座
C10	平家女護島	享保四年八月(一七一九) 竹本座

*検討の対象としたのは『近松全集』(岩波書店刊)第一〜十三巻に収録された作品のうち、平家物語中の説話が作品の中心となっていると考えられるもの。初演年月・劇場は『義太夫年表近世篇』・『近松全集』解題に拠る。

文耕堂

作品番号	外題	初演年・劇場・合作者
B1	仏御前扇軍	享保七年(一七二二)、竹本座、松田和吉、近松門左衛門添削
B2	三浦大助紅梅豹	享保十五年(一七三〇)、竹本座、長谷川千四・文耕堂
B3	須磨都源平躑躅	享保十五年、竹本座、文耕堂・長谷川千四
B4	壇浦兜軍記	享保十七年(一七三二)、竹本座、文耕堂・長谷川千四
B5	御所桜堀川夜討	元文二年(一七三七)、竹本座、文耕堂・三好松洛
B6	ひらかな盛衰記	元文四年(一七三九)、竹本座、文耕堂・三好松洛・浅田可啓・竹田小出雲・千前軒
B7	伊豆院宣源氏鏡	元文六年(一七四一)、竹本座、文耕堂・三好松洛・小川半平・竹田小出雲・千前軒

並木宗輔

作品番号	外題	初演年・劇場・合作者
S1	清和源氏十五段	享保十二年(一七二七)、豊竹座、並木宗輔・安田蛙文
S2	蒲冠者藤戸合戦	享保十五年(一七三〇)、豊竹座、並木宗輔・安田蛙文
S3	待賢門夜軍	享保十七年(一七三三)、豊竹座、並木宗輔・安田蛙文
S4	那須与市西海硯	享保十九年(一七三四)、豊竹座、並木宗輔・並木丈助
S5	石橋山鏡襲	寛保二年(一七四二)、江戸肥前座、為永太郎兵衛・並木宗輔

その他の作者

作品番号	外題	初演年・劇場・合作者
T1	頼政追善芝	享保九年(一七二四)、豊竹座、西沢一風・田中千柳
T2	大仏殿万代石楚	享保十年(一七二五)、豊竹座、西沢一風・田中千柳
T3	伊勢平氏年々鑑	享保十一年(一七二六)、竹本座、竹田出雲
T4	加賀国篠原合戦	享保十三年(一七二八)、竹本座、竹田出雲・長谷川千四
T5	太政入道兵庫岬	元文二年(一七三七)、竹本座、竹田小出雲・竹田正蔵

表2 利用説話一覧

近松門左衛門

巻数・段名	作品での扱い	作品番号
1 (一) 妓王)	出家後の妓王妓女の庵室	C9
2 二(三) 足摺ほか	鬼界が島への流人と赦免、俊寛一人が島に残る	C10
3 五 文覚荒行ほか	文覚は義朝のどくろを奪い返し、蛭が小島へ向かう	C10
4 五 奈良炎上	重衡、南都焼き討ち後凱旋	C10
5 六 入道逝去	清盛、東屋・千鳥の崇りによりあつち死に	C10
6 七 忠度都落	忠度は俊成に歌集を託すため、都落ちの途中から引き返す	C3
7 九 一二の懸	熊谷直実、子息小次郎とともに先陣を果たす	C7
8 九 忠度最後	忠度、岡部六弥太に討たれ、籠の短冊により身許が知れる	C3
9 九 敦盛最後	敦盛、熊谷次郎直実に討たれる	C7
10 (九 敦盛最後)	熊谷、出家して蓮生と名乗り、黒谷法然坊の弟子となる	C7

巻数・段名	作品での扱い	作品番号
1 一 妓王	清盛は妓王を寵愛するが、渋谷土佐次郎正俊の妻延寿がやつした仏御前に寵を奪われる。妹の妓女は、清盛を敵と狙う長谷部信連と通じている	B 1
2 (四 信連合戦ほか)	以仁王の乱後、生き残った長谷部信連は清盛を敵と狙うが、景清に阻まれる	B 1
3 (四 橋合戦)	橋合戦で先陣を果した田原又太郎忠綱は、狂気を装い高倉の宮の若宮の命を救う	B 7
4 盛十三	丁七唱が宮執心の笛小枝を三井寺に取りに戻す間に宮が討たれる。宮を裏切った乳母子宗信は宮の愛人讃岐に横恋慕する	B 7
5 (盛十六)	猪早太、丁七唱ら頼政の家来は、讃岐と若宮を守護する	B 7
6 盛十八	伊東入道祐親は八牧判官兼高と組んで頼朝を討とうとするが、金吾が身替りとなる。乙女の前は身替りになりそこねる	B 7
7 盛十九	頼朝は藤九郎盛長を供に文覚を訪れる。文覚は入定と偽り院宣をいたたく謀をこらし、義朝のどくろを頼朝に見せる	B 7
8 盛二十	石橋山合戦での与市の討死を、乳人文蔵がお土に語る	B 2
9 盛二十一・二十二	三浦大助義明、嫁らとともに衣笠城に立てこもり、応戦	B 2
10 盛二十二	頼朝一行が敗走中に、八丁礮喜平次の後家に烏帽子を誂えさせたところ、頼朝だけ左折だったので吉事と喜ぶ	B 2
11 六 小督	小督は宗盛に横恋慕されるが信連に危ういところを救われ、法輪寺辺にいる妓王・妓女・母とち・仏御前の元に隠れる。思い焦がれた天皇は仲国とともに探し尋ねる	B 1
12 七 忠度都落	狐川から俊成館に引き返した忠度は阿根輪平次に切りかかれるが、六弥太の機転で俊成館の門内に入る	B 3
13 盛二十三	尾形惟秀の息子、二郎惟光・三郎惟義はそれぞれ平家・源家に仕官を定めるが、父から、二郎は平家に討たれた菊地二郎太夫の息子と明かされ、二人で後白河院の守護に向かう	B 3
14 盛三十五	義経は入京に際し里人に道を尋ね、好地名に喜ぶ	B 6
15 盛三十五	宇治川の先陣争いで敗れた梶原源太景季は母から勘当を受けるが、先陣を譲ったのは佐々木四郎が父を庇ってくれた恩義に報いるためと明かす	B 6
16 盛三十五	木曾義仲の横暴は、平家から三種の神器を取り戻すための計略。木曾四天王のうち、一人生き残った樋口次郎兼光は主君の仇を討つため、船頭にやつして機会をうかがう。しかし、我が子と取り違えられたのが木曾の遺児駒若とは気づかない	B 6
17 盛三十七	梅が枝が無間の鐘に見立てて手水鉢を打つと、奥の客(実は源太母延寿)が三百両をふらせる。源太は、その金で請け出した産衣の鎧の籠に紅梅を挿して出陣	B 6
11 十 藤戸ほか	佐々木盛綱は、浅瀬を教えた浦人を殺し、見事先陣を果たす	C 2
12 十一 嗣信最後	屋島合戦の折、次信は義経の身替りとなって射落とされる	C 8
13 十二 土佐房被斬	頼朝から義経追討に遣わされた土佐房は、逆に義経に討たれる	C 9
14 * 1	主馬判官盛久は源氏に生け捕られるが、観音の利生により助命される	C 5
15 * 2	景清は頼朝を討つべくうかがうものの果たせず生け捕られるが、観音の利生により助命され、日向宮崎庄を与えられる	C 1
16 * 3	津戸三郎は佐藤兄弟を義経に推挙する。次信追善結願の日、法然の示す奇瑞に一念発起し、割腹して壮絶な往生を遂げる	C 8

18	九 忠度最後	館に短冊を挿して一谷合戦に向かい、六弥太と組討ちになった忠度はわざと討たれようとするが、裡菊が追いつき、忠度の右腕をむね打ちする	B 3
19	(九 重衡虜)	生け捕られた重衡は義経と対面。重衡を裏切った乳母子後藤兵衛盛広は逃亡するが捕らえられて成敗される	B 3
20	九 敦盛最後	敦盛は扇屋若狭のもとに扇折小萩として匿われている。客として訪れた熊谷次郎直実はそれと知って見逃し、若狭の娘桂子が敦盛の身替りとなる	B 3
21	(盛四十)	名剣小鳥を義経に渡そうと出立した渋谷谷司胤俊は、田上宿で転寝の際に平家方の有国に小鳥を奪い取られた上、殺害される	B 1
22	盛四十一	松右衛門(実は樋口)は逆櫓をてこに梶原に取り入るが、すでに梶原はそのことに気づいており、樋口は重忠に生け捕られる	B 6
23	(十一 弓流)	景清と鍛引きで争った箕尾谷はその後景清をつけ狙うが、実は景清と兄弟だということが兜の鍛から知れ、ともに鎌倉に向かう	B 4
24	十一 平大納言文沙汰	義経は頼朝から渡すよう命ぜられていた平家の連判状を焼き捨てる	B 5
25	(十二 土佐房被斬)	渋谷土佐二郎正俊(元・義朝童金丸)は重盛を父庄司胤俊の敵と思いい、重盛を討つため妻の延寿を仏御前とやつして送り込むが、実際の敵は延寿の父有国とわかる。有国の首を打った土佐二郎は出家し、土佐房正俊と名乗る	B 1
26	盛四十六	土佐房昌俊は梶原の讒言から義経を守るため、梶原とともに義経の討手に向かう。十三年前に義経千人斬りで殺されたと思っていた伊勢三郎の父は、実は土佐房が誤って殺害したことがわかるが、土佐房は義経を救うため、伊勢に猶予を乞う。堀川に夜討をかけたのは、土佐房昌俊ならぬ正尊に化けた番場忠太	B 5
27	* 1	大場・俣野兄弟は鎌倉絃掛観音に参詣。六郎大夫の刀を所望し、来合わせた梶原に目利きを依頼する	B 2
28	* 2	清盛を狙う信連を景清が繰り返し阻む	B 1
29	* 3	熱田大宮司のもとに匿われていた景清は愛人阿古屋とその兄十歳の助けを得て頼朝を狙うが果たせず、両眼をくりぬき頼朝のもとに下る	B 4

並木宗輔

	巻数・段名	作品での扱い	作品番号
1	三 金渡	藤太夫とおぐまの軍司は重盛が唐土青王山へ祠堂金三千両を渡すとき千両を盗んだ。その償いのため、源氏方の盛綱に偽の浅瀬を教えたと言い、六代助命のため盛綱に正しい浅瀬を教えて死ぬ	S 2
2	盛十六	白井庄司広匡の娘あやめは秘伝の巻物と雷上動の弓矢を持参して頼政と夫婦の約束をするが、近衛院の内侍として召し連れられる	S 3
3	四 鶴	近衛院が病になり、頼政主従は化け物を雷上動の弓矢で射落とす。褒美として院は頼政にあやめと名剣獅子王を下賜する	S 3
4	盛二十	石橋山の合戦で与市と俣野が組み合うところへ俣野妻小団巻がかけつけ、声を頼りに与市を刺すが、実は与市の父岡崎四郎で、呉服と今若を助けてもらった礼に自分が与市として討たれ、俣野の名を揚げようとしたと語る	S 5
5	(盛三十八)	敦盛の家来伊賀平内左衛門光起・娘二見は偶然出会った宗清とともに義経陣所に忍び込むが、平内左衛門は討死、宗清は義経の配慮で助けられた二見を連れ都に向かう	S 4
6	十 千手	千寿(長田庄司忠宗の娘)は今若(義朝遺児)の身替りとして、自分と重衡との間に生まれた重松の首を差し出す	S 5
7	(十 三日平氏)	宗清は建礼門院を連れて逃げる	S 4
8	(十 維盛出家ほか)	斎藤五は盛綱を味方につけるため説得するが失敗。梶原の家来が六代を狙うが、斎藤五の妻唐綾が身替りとなる	S 2
9	十 藤戸	盛綱は嘘の浅瀬を教えた藤太夫(伊賀平内左衛門)を殺害し、先陣を果たす。その後、文覚とともに藤太夫の回向をおこなう	S 2
10	十一 那須与一	那須与一は息子二人を八島軍に伴うが、二人は生け捕られる。二人を助けた宗清は、扇の的を射た矢の方向を手がかりに二人を与一のもとに返し、自害する	S 4

